

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』
第1部 第1章 第1節

岡 村 眞紀子
岡 田 典 之
川 島 伸 博 訳

第1項

人間の優越性、ならびに墮落、悲惨、欠陥、それらの原因。

人間、世界で最も優れて高貴な被造物、ゾロアスター曰く「神の主要で力強き作品であり、自然の驚異」, 「大胆なる自然の奇蹟」, プラトン曰く「驚異の中の驚異」, プリニウス曰く「世界の要約にして梗概」, 「小宇宙」, 小さな世界, 世界のひな型, 地上の主権者, 世界の総督, 世の被造物の唯一の指揮官にして統治者であり, 被造物は各々その支配に服して従属する。あらゆるものを肉体においてだけでなく魂においても凌駕し, 「似姿の中の似姿」であり, 神に属するあらゆる権能とともに神の「姿」, かの不死で非物質的実体に即して創造されし者, この人間は, 当初は純粹, 神聖, 完全, 幸福, 「その聖性と正義において神に似せて創られ」, 神々と調和し, あらゆる病を免れ, 楽園に置かれ, 神を知り, 神を讃美し称え, 神の意志を行い, (古の詩人が述べるように)

神々に似た者として神々を産むようにと

造られ, 教会を繁栄させるのである。しかしこの最も高貴な被造物は——なんと悲しく涙を禁じえない変化(と嘆く者もある), おお哀れな変化!——かつての地位から転落し, 住処を没収され, 哀れな人形, 見捨てられし者, 卑しき者となり, この世で最も哀れな被造物であり, その本性において考察すれば悔い改めない人であり, その墮落によってあまりにその栄光を奪われたので, (いくらかの残り物があるとはいえ) 獣にも劣るのである。「栄華のうちにありながらそれを理解しない者は, 滅びうせる獣の如し」とダビデは考えている。恐るべき変身によって生まれた怪物, 狐, 犬, 豚, 等々。なんと変わってしまったことか, かつては祝福され幸福で, 今では呪われ悲惨であるとは。「人は悲しみのうちに食物を摂り」, あらゆる悲惨と全ての病と死の下に置

かれる。「大いなる労苦が人のために創られ、アダムの息子達に重き軛が課せられる、母の腹から生まれた日から、全ての母の元へと帰る日まで。すなわち、心の迷いと恐れ、来るべきものと死の日への恐れである。栄光の玉座に着く者から、土と灰にまみれる者まで。青き絹を身に纏い、王冠をかぶる者から、質素な亜麻布を着る者まで。怒り、妬み、心労、不安、死への恐れ、困苦と不和は、人と獣に等しく訪れるが、神を認めぬ者には七倍となる」。これら全ては現世で人の身に降りかかり、また来世では永遠の悲惨に見舞われるかもしれない。

人間のこれらの悲惨、神の似姿の喪失もしくは破壊の推進因、死と病、現世の、また永遠のあらゆる罰の原因は、悪魔の唆しと誘惑により禁断の実を食べた、我らが父祖アダムの罪である。彼の不従順、慢心、野心、不節制、不信心、好奇心、そこから原罪と人間の腐敗全般が生じ、泉から湧き出る如くあらゆる悪しき性向と罪深き行為が溢れ出し、これが罪故に我らに課された個々の悲惨を招いている。これがおそらく、寓話を語る詩人たちがパンドラの箱の物語で我々に仄めかしていることであろう。その箱は好奇心によって開けられ、あらゆる種類の病でこの世を満たしたのである。しかし、個々の病と悲惨を我々の頭上にもたらすのは、好奇心だけではなく、その他の甚だしき罪でもある。クリソストモスの「罪あるところに嵐あり」は至言である。「愚かなる者は罪悪のため不正のために打ちのめされる」。神を恐れなかったが故に「恐怖が突然の荒廃の如く、破壊がつむじ風の如く、苦痛と苦悩が訪れる」。「汝は戦に震えているのか」とキプリアヌスが適切にもデメトリオスに諫言したごとく、「あなたは飢餓と困窮に悩まされているのか、あなたの健康は荒れ狂う病に押しつぶされているのか、人はみな押し並べて疫病に苦しむのか、全てはあなたの罪のためである」(『ハガイ』1: 9,10, 『アモス』1, 『エレミア』7)。神は怒り、罰し、脅すが、人は頑迷固陋の故に神に向かおうとはしない。「もし大地が旱魃の為に不毛となり、乾き汚れて実を結ばず、もし泉が干上がり、ブドウも小麦もオリーブも打ち萎れ、もし大気が腐敗し人が病に悩むなら、それはあなたの罪の故である」。その罪はアベルの血の如く天に向かって復讐を求めて叫ぶ。「我々は罪を犯したが故に、心は打ち沈む」(『哀歌』5: 15)、「我々は罪と過ちの故に、熊のように吠え、鳩のように嘆き、健康を失う、云々」(『イザヤ』59: 11, 12)。しかし我々は、こうした話に耐えられず、聞く耳を持たない。「我々は打たれても無駄であり、戒めを受け入れない、云々」(『エレミア』2: 30)。「汝は彼らを打ったが、彼らは悲しまず、懲らしめを受け入れることを拒み、戻らなかった」(『同』5: 3)。「神は疫病を送ったが、彼らは神に帰らなかった」(『アモス』4)。ヘロデ王は洗礼者ヨハネの言うことに我慢ならず、ドミティアヌス帝はアポロニウスがエフェソスの疫病の原因、すなわち帝の不正、近親相姦、不義密通等を告げるのに耐えられなかった。

それ故に、我々のこの蒙昧と頑迷を、併存的な原因かつ主要的な能動原因として罰することが、神の正しき裁きであり、いわば我々の罪の故に神は我々を懲らしめ、その怒りを満足させるために、こうした悲惨を与えるのである。『申命記』28: 15以下に十分に説かれているように、法は遵守

か懲罰を求めるのだから。「もし彼らが主に従わず、戒律と儀式を守らぬならば、あらゆる呪いが彼らに降りかかるであろう」、「町においても野においても呪われ」、「身から生まれるものにおいて呪われ」、「主はあなたの邪の故に、困難と恥辱を送るだろう」。さらに続けて「主はエジプトの腫物と壊血病と疥癬と皮癬とであなたを撃ち、あなたは癒されることはないだろう」、また「狂気と盲目と錯乱で」撃つであろう。パウロもこれに賛同し、『ローマ人への手紙』2: 9で「悪を行う全ての人の魂に艱難と苦悩が」与えられると述べている。あるいはこれらの懲罰は、我々を謙虚にさせるために与えられる、すなわちこの世での忍耐を鍛え、また試し、正気に立ち返らせ、神と我々自身について知らしめ、我々に知恵を示して教えるために。「故に我が民は囚われた、彼らは無知であったがために。故に神の怒りはその民に向けて燃え上がり、神はその民に手を下された」。「**神は我々の救済を願う**」とレメンスは述べているが、その大義のために神は何度も我々の耳をつかんで引き、我々に義務を思い起こさせるのである。「誤れる者は悟りを得」（『イザヤ』29: 21）、「それ故、正されるようにと」。「私は苦しみ、死の淵にいる」とダビデは『詩篇』88: 15で告白し、『同』9では「私の眼は苦悩にあって悲しむ」と言っている。それ故にダビデは神に向かったのである。アレクサンダー大王は栄華を極め、追従者たちによって神格化され、いまや神と祭り上げられたが、その時自らの傷が出血するのを見、自分がただの人であることを思い出し、その傲慢さを捨て去った。プリニウスが見抜いたように「**病においては、精神は自らを振り返り、分別を持って自らを調べ、以前の行いを忌み嫌う**」。そこで彼は友人マリウスに宛てて「病んだときに正気であり続け、約束したことの一部でも行うなら、それはまさに哲学の極みとなるだろう」と結論している。ダビデのように「すべて賢き者はこれらのことに心して」（『詩篇』144: 15）、どのような運命が降りかかっても、これを利用するのである。悲しみ、困窮、病、その他の逆境にあって、自ら深く省察し、なぜあれやこれやの災厄、苦痛、あれやこれやの不治の病に苦しむのかを考えることは、ペトラルカが娘の瘡について述べたように、有益であり、「まさにかくあるべき」である。肉体の病は魂の健康のためになり、**破滅なければ破滅あり**、もし病に襲われなかったら、全き破滅に襲われていたかもしれない。というのも、「主は、父親がお気に入りの息子にそうするように、愛する者を戒める」からである。もし逆に、安寧で健康、あらゆる病を免れ、そして

その者が魅力、美、好意、健康を持ち

清き食事を摂り、豊かな富に恵まれている

としたら、その繁栄の只中で、驕り昂ぶらず、幸運は神の賜物であり恩恵であることを忘れぬように、モーゼの警告「彼の神、主を忘れぬように心せよ」を思い起こし、また認めるようにも心して、「持てば持つほど、感謝の気持ちを忘れず」（アガペティアヌスが忠告するように）、それらを正しく用いなければならない。

さて、我々の災厄の道具的原因は、災厄そのもの、星々、天、四元素等々、多様であり、神が創られた全ての被造物は罪人に対して反旗を翻す。それら自体はかつては善であり、今では多くが我々にとって有害なものとなった理由は、それらの本質にあるのではなく、その事態を招いた我々の墮落にある。我々が父祖アダムの墮落から、それらは変化し、大地は呪われ、星の感応は変質し、四元素、獣、鳥、植物は今や我々を襲わんと待ち構えている。「人が用いる主要なものとは、水、火、鉄、塩、ひき割り粉、小麦、蜂蜜、乳、油、ワイン、布であり、敬虔な者には役立つ、罪人には邪悪なものとなす」（『シラ』39: 26）。「火と雹と飢餓と死は、すべて復讐のために造られた」（『シラ』39: 29）。天は彗星、恒星、惑星を用い、それらの大会合、蝕、衝、矩、その他有害な星位で我々を脅かす。大気は流星、雷鳴、稲妻、酷暑と酷寒、強風、嵐、天候不順で脅かし、そこから凶作、飢饉、悪疫、あらゆる種類の伝染病が生じ、無数の人の命を奪う。エジプトのカイロでは三年毎に（ポテロその他が語るところによると）三十万人が、コンスタンティノーブルでは少なくとも五年から七年に一度は二十万人が疫病に倒れる。いかに大地が恐るべき地震で我々を脅し、圧倒することか。これは中国、日本、その他東方諸国で最も頻繁に起こり、時には一度に六つの都市を飲み込むのである。いかに水が洪水や鉄砲水で荒れ狂い、船を難破させるだけでなく、街や都市や村をなぎ倒すことか。時には島全体が住民ごと突然に飲み込まれ、ゼーラント、ホラント、その他大陸の多くの場所で、アイルランドのアーン湖のように、人々は溺れ死んだ。「広がる水面上には城塞の残骸以外は何も見えない」。フリースラントの低地では、1230年、嵐の際に海が「何千人もの人間と無数の家畜」を、人も牛もまとめてほとんど国全体を水に沈めた。あの無慈悲な元素である火が、いかに荒れ狂い、瞬時に都市全体を焼き尽くしてしまうことか。古来の、あるいは名だたる街で、この無慈悲な元素の怒りによって、一度、あるいは度々、損なわれ、破壊され、灰燼に帰したことの無いものがあるだろうか。一言でいえば

**火が見逃した者を海が溺れさせ、海が見逃した者を
悪疫を運ぶ空気が土へと返す
戦争が見逃した者を病が連れ去る。**

さらに細かい点を述べれば、いかに多くの被造物が人間と致命的に反目していることだろうか。ライオン、狼、熊、等々、そして蹄、角、牙、歯、爪を持つものが襲う。いかに多くの毒蛇やその他の有毒な被造物が針や息や視線で我々を攻撃し、さらには殺そうと待ち構えていることか。いかに多くの有害な魚、植物、樹脂、果実、種子、花、等々を即座に数え上げられることか。それらの多くは嗅覚、触覚、味覚を通して、死とまではいかなくとも重大な病を引き起こす。一千種類の個別の毒を挙げる者もいる。しかしこれらは、比較的些細なことに過ぎないのである。人間の最大の敵は人間であり、悪魔の唆しによって進んで悪事を行い、自らの処刑人となり、自分自身と他人にとって狼や悪魔と化す。我々はキリストにおいて兄弟であり、一つの体の四肢、一人の主仕える僕である、あるいは少なくともそうあるべきだが、人が人に対して行うほど、人

を苛み、侮蔑し、虐げ、悩ます敵はいない。それ故、どうか人の手に、特に無慈悲で邪悪な者の手に落ちることがないように（とダビデは、戦争、疫病、飢餓が示された時に述べたのである）。

人はその名に値しない

狼よりもはるかに残虐であるがゆえ。

我々は大抵は伝染病を予見できるし、それらを避けることもできるかもしれない。飢饉、嵐、疫病は、占星術師がこれを予測してくれる。地震、洪水、家々の倒壊、焼き尽くす炎は、徐々に近づいてくるか、あらかじめ何らかの音を立てる。しかし人の行う悪行、ペテン、侮辱、非道は、いかなる技でも避け難い。あからさまな敵は門や壁や塔を用いて市街から締め出し、細心の注意と武器で盗人や強盗から身を守ることもできる。しかし人の悪意と邪悪な営みは、いかに注意しても避けられず、いかに警戒しても予測できない。互いに害を為すためのあまりに多くの秘密の計略と手段があるのだ。

時には魔術師、魔女といった悪魔の手先によって、時には詐欺、混合薬品、毒、計略、小競り合い、戦争によって、我々は、生まれてすぐに殺しあったカドモスの兵士達のように、**あたかも殺す為に生まれたが如く**、お互いをたたき切る。一度の戦いで十万から二十万人が死んだと聞くのも珍しくはない。青銅の雄牛、拷問台、刑車、つるし刑、銃、責め具、等々のあらゆる拷問に飽き足らず、我々は、キプリアヌスがいみじくも述べたように、「**人間の器官の数より多くの拷問具を考案した**」。さらに身近なところでは、我々自身の親が、その罪、無分別、不節制によって、我々の致命的な敵となる。「父達が、酸いぶどうを食べたので子供たちの歯がうく」。親は幾度も我々の悲嘆のもととなり、遺伝病、避けられない病を押しつける。親は我々を苛み、同様に我々はいつでも子孫を害せんと構えている。

今にもさらに邪悪な子孫を産もうとして。

そしてパウロが予言したように、この世の終わりは最悪のものになるだろう。このように我々は生まれによって悪であり、血統によって悪であるが、さらに技芸によって悪となり、皆が皆、自らの最大の敵となる。我々は自身を破滅させるために学ぶことも度々であり、神が我々に与えてくれた賜物、健康、富、力、知恵、学問、技芸、記憶を、自らの破壊のために濫用する。「**あなたの破滅はあなたから生じる**」。ユダ・マカバイがアポロニウスの友人をアポロニウスその人の剣で殺したように、我々は自身の滅亡のために武装し、我々の助けとなるべき理性、技芸、判断力を、我々を滅ぼすための道具として用いる。ヘクトルはアイアスに剣を与え、それはアイアスが敵と戦う限りでは、彼の助けとなり、防御となった。しかし、アイアスが無害な生き物をその剣で殺し始めると、それは彼の不死身の臓腑へと向けられたのである。神が与えた優れた手段は、

善用されれば我々に大いに役立たないはずはないが、逆に悪用されれば、我々を破滅に追いやる。そして大抵は無分別と弱さの故にそうなるのであり、その例には事欠かない。聖アウグスティヌスは謙虚な告白の中で自らこれを認め、「機敏な知性、記憶、雄弁、これらは神のすばらしい贈り物であるが、これを神の栄光のためには用いなかった」と述べている。いかにして、またどのような手段によって被るかの特に知りたいのなら、医者に尋ねるとよいだろう。医者は、それは六つの非本性的な事項に於ける過ちにあると言うが、これについては後に詳しく述べよう。それら六つは我々の病、飽食と酩酊、度を越した満たされない欲望と恐るべき放縱の原因となる。酒は剣よりも多くを殺す、とはよく言ったものだ。我々の頭上に多くの不治の病を引き寄せ、老化を早め、気質を歪め、突然の死をもたらすのは我々の不摂生である。そして最後に、我々を最も苦しめるものとは、我々自身の狂気、愚かさ（ユピテルは破滅させようとする者を狂わせる、神は助けとなる恩寵を減じることによって人を狂気にする）、弱さ、思慮の不足、個別の欲望に安易に身を任せ、あらゆる情念と精神の乱れに屈してしまうことである。これによって我々は自ら変身し、野獣へと墮落する。機嫌よく情念を抑制している時は、顔つきはユピテル、勇気はマルス、知恵はパラスに似て、神の如くだが、怒ればライオン、虎、犬の如くでユピテルの面影はどこにもない、と詩人の王はアガメムノンについて述べている。そのように我々も、理性に従い、過度の欲望を戒め、自らを神の言葉で律している限りは、生ける聖人となる。しかし、欲望、怒り、野心、慢心に身を任せ、己の道を突き進めば、野獣に墮ち、姿を変え、本分を打ち捨て、神の怒りを招き、我々の罪に当然に値する罰として、あの憂鬱症やすべての不治の病が山と降りかかるのである。

第2項

病の定義、数、分類。

病とは何かについては、殆どの医者が定義している。フェルネルは病を「自然に反した肉体の障害」と呼んでいる。フックスとクラトによると「何であれ、肉体あるいはその一部の機能が妨げられ、傷められ、変えられること」である。トゥールーズのグレゴワールによれば病は「肉体と魂との紐帯の分離や乱れであり、それは健康がその絆の完成であり、その保全へと向かうのと同様である」。アウルス・ゲリウスに引用されたラベオによると「自然に反した肉体の悪しき習慣であり、肉体の使用を妨げるもの」である。各人各様だが、すべてこのようなものである。

どれぐらいの数の病があるかは未解決の問題である。プリニウスは頭頂から足裏まで三百を数え、また別の箇所では「その数には限りがない」と述べている。たとえ古においてそうであったとしても、それは現在では通用しない。間違いなく我々の時代には、その数は大いに増えてしまったのである。

消耗性の病と新たな熱病が

群れをなして地に降り立った。

壊血病，天然痘，糾髪症，粟粒熱，梅毒，等々，これまで聞いたことが無く，ガレノスやヒポクラテスが全く知らなかった多くの伝染病に加えて，ほとんどあらゆる部位に固有，特有の病が数多くある。肉体あるいは精神に何の障害も持たないほど健康で頑強な体質をもつ者など存在しない。我らは皆，自らの靈の呵責に耐えねばならず，我々は遅かれ早かれ，多かれ少なかれ，皆，病をもつ。おそらくは一代，あるいは千人に一人ぐらひは，プリニウスが語るころの音楽家ゼノフィルスが如く，何の障害も持たずに幸せに百五歳まで生きる者もあるだろう。「ワインと油で」健康を保った，ポリリオ・ロムルスのような者もいるだろう。ウァレリウスが大いに自慢した，クイントゥス・メテルスのように幸福な者，ドイツはアウグスブルクの元老院議員オットー・ヘルヴァルドゥスのように健康な者もいるだろう。彼の話は占星術師レオヴィッツが，その術の確かさの例証として持ち出しているが，このオットーは，出生時の星位において支配的な惑星が幸運な位置を占め，土星と火星の邪悪な星位を免れていたため，かなりの高齢ではあったが「かつて病んだ記憶などなかった」のである。パラケルススなら，ある人を子供の頃から手ずから育て，指示通りの食事をさせれば，その人を四百歳かそれ以上生かすことができると大言壮語するだろう。寿命に決まった限界は無く，節制と医術によってさらに延ばせると説く医者もいる。一方で我々の日々の経験からすると，誰も病を免れることなどできず，ヘシオドスの言うことがもったもなのである。

大地も海も，昼夜を問わず我らを襲う

病で満ち溢れている。

人が罹る通常の病のさらに厳密な分類をお望みなら，医者達の著作に当たるとよいだろう。急性と慢性，一次的なものと二次的なもの，致命的なものとは非致命的なもの，移動性のものと固着性のもの，単純なものとは複合，結合，もしくは必然的に生じるもの，部分に関わるものか体全体に関わるものか，習慣においてか素因においてか，等々。ここでは（本書の目的に最も適うよう）肉体の病と精神の病に分類しよう。肉体のものについてはフックスが『綱要』3巻1部11章で簡潔な一覧表を示している。また，ガレノス，アレテウス，ラーゼス，アヴィケンナ，アレクサンデル，パウルス，アエティウス，ド・ゴルドン，グアイネリオの大部な著作，またサヴォナローラ，カピヴァキウス，ドナート・アルトマーレ，エルコレ・サッソーニア，メルクリアーレ，ベネデット・ヴィットーリ，ヴェッカー，ル・ボワといった，秩序立てて詳細に述べている，当代の厳密な医師たちの著作を参照するとよからう。精神と頭部の病については，これらを個別に簡潔に扱うことにしたい。

第3項

頭部の病の分類。

精神の病は、それらが主として頭の中の器官に座を占めているのであるから、大抵は頭部の病の中で再び扱われることになるが、それらは多様で、その病変部に応じてかなり異なっている。というのも、頭部には個々の部分があり、それだけ多様な悩みの種がある。これはヴェン・ヒュールネの分類（アルコラーニから採られたものだが）によると、内部と外部に分けられ、外部のものとは（眼、耳、鼻腔、歯茎、歯、口、口蓋、舌、気管、口腔、顔面、等々に属する全てを除くと）、禿、脱毛、ふけ、虱、等々、頭蓋に固有に属するものである。内部のものとは、様々な頭痛のように、硬膜、軟膜と呼ばれる、脳に隣接した膜に属するもの、また、麻痺、眩暈、夢魔、卒中、癲癇のように、脳室、大網膜、細管、およびその一部に属し、それらの部分の重大な災厄であるものがある。また神経の病として、痙攣、意識混濁、ひきつけ、震顫、中風がある。また、脳からの排泄物に属するものとして、カタル、くしゃみ、水性分泌物、鼻水がある。また脳の実質そのものに関係するものもあり、そこには、精神炎、嗜眠、憂鬱症、狂気、記憶障害、昏眠、不眠、発作性睡眠が数えられる。これらから想像力もしくは理性そのものに固有に属するものを選んで論じるが、これはデュ・ローランが精神の病と呼び、ヒルデスハイムが「衰弱した想像力もしくは理性の病」と呼ぶもので、数にして三つか四つ、すなわち精神炎、狂気、鬱病、精神衰弱があり、また同種のものとして恐水病、狼憑き、舞踏病、悪魔憑きがある。これらは手短に扱うにとどめ、他のものより特に顕著なものとして特に鬱病に注目し、そのあらゆる種類、原因、徴候、診断、治療法を述べていくことにしたい。ロネルスが卒中について、また他の作家たちが個別の病について行ったようにである。かつてこの主題について書いた人たち、すなわちヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ、デュ・ローラン、モンタルト、ティモシー・ブライト、等々に問題があったというわけではなく、それぞれの題材と方法において優れた仕事をなしたのだが、しかしある者が見落としたことを他の者が幸運にも見つけるかもしれないし、ある者が手短に述べたことを他の者が敷衍できるかもしれない。スクリボニウスの言葉を借りて結論として言えば、「彼らが無視したりおざなりに扱った事柄を、我々はより徹底的に検討し、曖昧に述べられていることを明瞭に、広く詳しく述べるであろう」、そして誰にとってもより身近で理解し易いものとし、万人共通の財産となるようにするであろう。それこそが私の論説の主要な目的なのである。

第4項

耄碌、精神炎、狂気、恐水病、狼憑き、舞踏病、恍惚。

「耄碌」（痴呆、あるいは愚鈍）は、以下に挙げる病気に共通する名称であると主張する者もいる。デュ・ローランとアルトマーレとは「狂気」と「憂鬱」と他の病気とをこの名称のもとに包括し、この種の病気を名指す最上群であるとしている。耄碌を他の病気と区別するのであれば、

それは「先天的」あるいは「生来的」ものであり、いわゆる阿呆に見られるように器官の欠陥や湿性の高い脳によって生じる類のものである。そして大抵の場合、この病気は個々の人間において強まったり、弱まったりするので、その点において、愚鈍の度合いは人によって異なっている。そうでない場合、この病気は後天的に他の病気に付随するもの、あるいはその症候として生じ、またそれらの病気とともに消えてしまう。もしこういった症状が続く場合は、それ自体が「憂鬱症」の徴候となる。

「精神炎 (Phrenitis)」はギリシャ語の「精神 (φρήν)」を語源とし、狂気や毫碌が持続する精神の病気であり、ひどい熱を伴い、あるいは脳、もしくは脳の膜か網に炎症が生じ、いずれにしてもひどい熱を伴い、狂気と毫碌とを引き起こす。しかし、「憂鬱症」と「狂気」には瘡を伴わないので、精神炎はこの点で両者と異なる。たとえばこの病気は持続的で、眠れなくなったり、記憶が損なわれたりなどする。「憂鬱症」の場合は大抵、無口になるのに対し、この「精神炎」の場合は騒ぎ立てる。このような相違点は数多く医者によって指摘されている。

「狂気」と「精神炎」と「憂鬱症」とは、ケルススや多くの者によって混同されている。また「精神炎」のみを別物とし、「狂気」と「憂鬱症」とを一つの病気と考える者もいる。この立場は特にヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデによって説かれるもので、狂気と憂鬱症とはただその程度によってのみ異なるものであり、一方はもう片方が進んだものとされ、ともに同じ原因から生じるものとされる。ド・ゴルドンもこの両者は、「増加と減少の度合いによって」、すなわち体液が増加したり、減少したりするにつれて異なると述べている。アレテウスとアレクサンデル・トラリアヌス、グアイネリオ、サヴォナローラ、ヴァン・ヒュールネも同意見で、ガレノス自身、これら両者を似ているという理由で、ごたませに論じている。しかし、当代の作家の多くはこれらを別物として扱っており、私はこの論考において彼らの見解に従うつもりである。彼らの定義に従えば、「狂気」は「毫碌」が強烈になったものであり、熱を伴わない狂乱状態とされ、「憂鬱症」よりもはるかに暴力的なものであるとされる。狂気は、怒りや喧騒、恐ろしい形相や行動、振る舞いに満ち、身体と精神とにおいて憂鬱症よりもはるかに激しく患者を苦しめ、それでいて恐怖や悲しみは伴わない。この患者はときに、すさまじい力と大胆さで暴れるので、三、四人の大人がかかっても取り押さえることができないこともある。また狂気は、熱を伴わないという点、あるいは記憶力が大抵の場合良好に保持されるという点においてのみ、「精神炎」と異なっている。つまり狂気は精神炎と同じ原因、胆汁が焼け焦げ、血が焼け、脳が炎症を起こすことなどにより生じる。フラカストロはこの定義にしかるべき時間的経過と、成年に達することを加えている。すなわち、子供の錯乱状態とは区別し、狂気を成年することで確固たる病気になると主張し、またヒヨスやベラドンナやワインを摂取することで偶発的に生じる狂気状態からも区別している。こういった狂乱状態にはさまざまな種類があるが、「恍惚」が馴染み深いものかもしれない。カルダーノも自分自身、望めば、恍惚状態に入ることができたと言っている。すなわち

「インドの」の司祭が託宣を告げる状態に。またオラウス・マグヌスはその書の3巻18章に書いているように、ラップランドの魔女達は「すべてを恍惚状態で予言する」のであり、友人達は何をしているのか、どこにいるのか、元気になっているのか、といったすべての質問に恍惚状態で答えるのだという。またこういった狂乱状態の一種に、グレゴリウスやビードがしばしばその著作の中で言及している「熱狂」、「啓示」、「幻視」が挙げられる。また悪魔による肉体的、精神的憑依状態、また「シビルの女予言者達」、あるいは詩的「熱狂」もこの部類に挙げられる。また毒性の薬草を飲んだり、タランチュラに刺されることで陥る錯乱状態をこの種類に分類する者もいる。こういった狂乱状態の中でもっともよく知られたものが、「狼憑き」、「恐水病」、「舞踏病」の三つである。

「狼憑き」は、アヴィケンナによって「ククブス」と呼ばれ、また「狼狂」と呼ばれることもあるが、夜になると男達が墓地や野原を叫びながら走り、自分達が狼かその種の獣でないとは、頑として認めない状態をいう。アエティウスとパウルスはこの病気を憂鬱症の一種としているが、私は多くの人と同様この病気を「狂気」の一種だと考えたい。そもそも、このような病気が存在すこと自体に疑いをもつ向きもあるが、ドナート・アルトマーレは、自分の生きている間にこのような状態の人間を二人見たと証言しているし、ヴァイヤーは1541年のパドゥアにおいて、自分が狼であること以外、けっして認めようとしなない人物の話を書いている。ヴァイヤーはまた、自分のことを熊だと思っているスペイン人の例も挙げている。フォレストゥスも数多くの例によってこの病気を確認している、彼自身が目撃者となっているいくつかの例の一つは、ホルントのアルクマーにいた貧乏な農夫で、いつも墓地や教会境内を徘徊し、血の気なく、浅黒く、醜く、恐ろしい形相をしていたという。それと似たほとんど変わらないものとして、プラエトゥス王の娘達がいるが、彼女達は自分達のことを雌牛だと考えていた。また『ダニエル書』のネブカドネザルは、解釈者によっては、この種の狂気に悩まされていたとされる。おそらくプリニウスが大胆にも「人間の中には、生きている間に狼となり、もう一度人間に戻るものもいる」と断言した背景には、この病気の存在があったのだと考えられる。同様に、パウサニアスの話に出てくる十年間狼の姿をしていて、その後元の姿に戻った男の話、オウイデイウスのリュカオーンの話などもこの病気が元になったのであろう。この病気の例をもっと知りたいと思う人には以下の文献の一読を薦める。アウグスティヌス『神の国』18巻5章、ミザルドゥス『センチュリア』5巻77番、シェンキウス1巻、ヒルデスハイム2巻「狂気について」、フォレストゥス10巻「脳の病気について」、オラウス・マグヌス、ポーヴェのヴァンサン『自然の鏡』31巻122章、ウェアリアヌス、ボダン、ツヴィンガー、ツィーグラ、ポウカー、ヴァイヤー、シュプレングラー等々。この疾患は、アヴィケンナ曰く、二月に最も起こりやすく、ヴァン・ヒュールネによると、最近ではボヘミアとハンガリーでよく起こっている。シェレルツは、リヴォニアで流行るだろうと認めるであろう。この症状に罹ったものは、昼の間はほとんど隠れていて、夜になると外に出てきて墓地や人気のないところで吠え叫び、アルトマーレによると「うつろな目をしていて、脚や腿に

はかさぶたがあり、とても乾燥していて青白い」。アルトマーレはまた、こういった症候の原因を示し、その簡単な治療法も書きとめている。

「**恐水病**」は、どの村でもよく知られている狂気の一種であり、アウレリアヌス曰く、狂犬に噛まれたり、引っ掻かれたり、シェンクが示しているように、触れられたり、時には匂いを嗅がれるだけで発症する狂気であり、人間だけでなく他の動物にも起こるものである。なぜこういう名がついているかという、この病気に感染した者が、水、あるいはあらゆる液体を見るのが耐えられなくなるからであるが、それは、おそらくその中に狂犬の姿が見えるからである。さらに驚くべき点は、狂犬病発症者が、どんなに喉が渴いていても（実際、この病気に罹るとそうなのだが）、水を飲むよりも死を選ぶ点だ。古代の作家、カエリウス・アウレリアヌスはこの「**恐水病**」が、肉体の病気なのか精神の病気なのか決めかねている。しかし、感染する個所は脳であり、原因となる毒は狂犬から感染するものであり、この毒はとても熱く乾燥しているので、体中の湿気を蒸発させてしまう。ヒルデスハイムは、このように狂って死に、死後解剖してみると体内には水がなく、血もほとんどなく、湿気がまったくなくなっていた者達について報告している。このように感染した者には、噛まれてから十四日後に水に対する恐怖が始まり、発症が遅れる者もいるが、それでも四十日か六十日後には発症する。ヴァン・ヒュールネ曰く、患者は決まって騒ぎ始め、水とグラスを避け、顔が赤くなって腫れ（その間に治療がなされないと）、二十日後には眠れなくなり、横になって塞ぎこみ、奇妙な幻を見るようになり、吠えたり叫んだりして、卒倒したり、しばしば癲癇の発作に襲われる。患者の尿には、子犬のような小さなものが見られるようになるという者もいる。この徴候が出てしまうと回復は不可能である。このような徴候は、六、七ヶ月後まで表れないとコドロロンキは言うが、グアイネリオによると七、八年、アルベルトゥスによると十二年ということになっている。しかし、ガレヌスは六から八ヶ月後だと主張している。偉大なる法律家バルドーはこの病で死に、フォレストゥスの患者であったアウグスティノ隠修士とデルフォイの女もこの病によって惨めに尽きてしまった。田舎（少なくとも海の近くに住む者）によって行われている治療法は、患者の頭を耳のところまで海水に押し込むものである。呪文を使うものもいるし、良妻なら薬の処方の方を知っているはずだ。しかしこのような場合になされる最良の治療法は、定評ある医者からもたらされるもので、その種のものを読もうと思っている人には、ディオスコリデス 6 卷 37 章、ヴァン・ヒュールネ、ヒルデスハイム、カポデイワッカ、フォレストゥス、シェンキウス、そしてとりわけ最近この主題について二冊の優れた本を書いたイタリア人のコドロロンキにあたってみるといい。

「**舞踏病**」あるいは「**聖ウイトゥスの舞踏**」は籀のはずれた舞踏であるとパラケルススは言っている。というのも、この病気に罹ったものは、死ぬまで、あるいは治癒するまで踊りつづけるからである。聖ウイトゥスの舞踏という名称は、これに罹ったものが聖ウイトゥスに助けを求めに行き、その場でしばらく踊ることで完全に治癒したという話に基づく。彼らがいかに長い時間

踊り続けるのか、どんな風に腰掛、長椅子、テーブルの上で踊るのか聞くと不思議な思いがする。お腹の大きな女性でさえ（胎児を傷つけることなく）、手も脚もぴくりともせず、まるで死んだようになるまで長期間踊り続けることもある。彼らが耐えられないのは赤い服を着た人で、何よりも音楽を好み、それゆえドイツの為政者達は、音楽家を雇って音楽を奏でさせ、元気で丈夫な連中を雇って彼らと踊らせているのである。この病気はドイツでよくみられ、シェンキウスとパラケルススの記述に表れる。特に後者は、その狂気についての本の中で、自分がいかに多くの舞踏病患者を治療してきたかを自慢している。フェリックス・プラターは「精神錯乱について」の3章で、自分が目撃したバーゼルの女が一ヶ月間踊り続けたと報告している。アラブ人達はこの病気を一種の麻痺だとみなしている。ボダン『共和政体について』の5巻1章で、この疾患に言及しているし、モナウもショルツへの最後の書簡、またデューディスへの別の手紙で言及、そこをあたれば、この病気についてさらに読むことができる。

狂気、あるいは憂鬱症に分類される最後の病気は、（そう呼んでよければ）悪魔憑き、あるいは悪魔による憑依であり、プラターなどは超自然的とみなすだろう。この患者については途方もないほど多くのことが伝えられていて、彼らの行動、振る舞い、「捻転」、断食、予言、習ったこともないはずの言語を話すことなどなど、奇妙な話がたくさん語られているが（ディーコンとダレルがこの主題について賛否両論、大著を書いているので）、おそらく許容してくれない人もいるだろうから、この手の話については意図的に省略することにする。

フックスが『綱要』3巻1部11章で、あるいはフェリックス・プラター、デュ・ローランはこれらの狂気他に、「愛」から生じる別の「狂気」、あるいは「研究」から生じる別の類、さらに神祕的、あるいは「宗教的狂気」を論じているが、これらはより適切には「憂鬱症」に属するものであり、これらに関してはすべて別々に論じるつもりであり、それだけで一巻の書物となるであろう。

第5項

不適切にもそう呼ばれている気分における憂鬱、曖昧な用語法。

この本の主題である「憂鬱」には、気分に表れるものと、常習的なものがある。気分におけるものは、悲しみ、欠乏、病気、苦難、恐怖、悲嘆、困難、精神の錯乱といったささいなことがきっかけで生じたり消えたりする一時的な「憂鬱」である。苦悶、気だるさ、重苦しさ、精神の苛立ちを引き起こす心配事、不満、物思いなどによって生じ、つまり、快楽、歓喜、喜び、悦びに反することがあると生じ、つむじ曲がりや嫌悪感を引き起こす。このように、気だるく、悲しみに満ちていて、不機嫌で、意気消沈し、悪意に満ち、孤独、すぐに動揺し、腹を立てている人物のことを我々は「憂鬱」だと呼んでいるが、これは曖昧で不適切な用法である。そもそも、こ

ういった「憂鬱」の気分から自由なものなど誰もいないのであって、自分は冷静沈着な人間であると主張するストア派の人も、賢明で、幸せで、忍耐強く、寛容で、神のごとく信心深い人達でも、多かれ少なかれ、時折この「憂鬱」の苦しみを感じているのである。この意味での「憂鬱」は人類全体に付随する性格なのである。「女より生まれし人間は移ろいやすく苦難に満ちている」。ゼノンやカトー、あるいは穏やかな気分の持ち主で「何事にも心乱されることなく、家を出るときも帰ってきたときも、同じ平静沈着な表情をしていた」とアエリアヌスが賞讃していたソクラテス、(彼の弟子であるプラトンを信じるのであれば)「どんな悲惨なことがふりかかろうとも」平静だったというソクラテスもまたこの憂鬱に大いに苦しんだのである。ウァレリウスがすべての幸福の例として挙げているクイントゥス・メテルスは、「これまで生きてきた者の中でもっとも幸運であり、もっとも栄えていたころのローマの都市に、高貴な両親から生まれ、人格もすぐれ、有能で、健康で、金持ちで、名誉ある上院議員であり、後に執政官となり、妻や子供にも恵まれた人物」とされるが、それでもこの男も、憂鬱から自由だったわけではなく、人並みに悲しむこともあった。サモスのポリクラテスは、他人の不幸に与りたくて、自分の指輪を海の中に投げ入れたものの、その後すぐ、釣り上げた魚から奇跡的にその指輪を取り戻してしまった。そんな彼でもまた憂鬱の気分から自由ではなかったのだ。いかなる人間もこういった憂いから身を守ることはできない。詩人たちが記しているように、神々でさえ、苦々しい煩悶やしばしば激情に襲われる。総じて「我々の人生は、天空みたいなもので、晴れ渡ることもあれば、曇ることもあるし、嵐に見舞われることもある。あるいはバラと同じで、花も咲けば、棘もある。はたまた一年の巡りとも似ていて、過しやすい夏があるかと思えば、厳しい冬もあり、旱魃に苦しんでいるかと思うと、心地よい雨が降ってくる。このように我々の人生は、喜びと希望、恐怖と悲しみと誹謗とが混ぜ合わさったものである。悲哀と快樂とはかわるがわるやってくる」、すなわち禍福はあざなえる縄の如し。

喜びの泉の真っ只中から苦々しいものが
生じ、花々の中にある我々を苦しめる。

ソロモンのいう如く、「哄笑の中にあってさえ悲しみは存在し」、アウグスティヌスが『詩篇』41の注釈で述べているように、宴会や浮かれ騒ぎの中にあってさえ、悲哀と不満とが存在する。「快樂の最中でも、残酷なるものが我々の喉元をおさえている」、というのも、概して一ポイントの蜂蜜に対して一ガロンの胆汁、一ドラムの快樂に対して一ポンドの苦痛、一インチの歡樂に対して一エルもの悲嘆が見つかるのであって、まるで椶の木を覆う蔭のように、こういった悲惨が我々の人生を取り巻いているのだ。ゆえに死すべき人間が今生において永続する幸福への道を模索することほど不条理ではかばかしいことはない。繁榮し喜びに満ちた生活でも、幾許かの苦しみ、不平、不満を有するのであり、人生はすべてが甘苦く (γλυκύπικρος)、悲喜こもごも、黒と白とのチェックのテーブルと同じように、人間、家族、都市には必ずや失墜と衰えとが存在し、

惑星が三分や六分にあつて順運かと思えば、四分の矩がきて、衝となる。我々は天を動かす天使達、太陽や月といった天体と同じように、この世にあるのではない。長い時代にわたつて天体のような確かさで、自分たちの行程をなんの攻撃を受けることなく過すことなどできない。我々は、病氣や悲惨を被る存在であり、妨害され、上へ下へと翻弄され、些細な風に運ばれるまま、少しでも不確かで脆いことがあるたびに、苦しみ心乱される存在、それが我々であり、我々が頼りとするものは、すべてこのようなものだ。(ある人が我々の時代を嘆くように)「そしてこのことを知らず、それに耐える心構えができていない者は、この世で生きるのに向いていない。つまり彼にはこの世の掟がわかっていない。この世では常に快樂と苦痛とが互いに結びついているのであり、循環する輪のように互いが連続するということが」。このことに耐え得ぬ者よ、この世を去れ、ここから立ち去れ。というのも、このことを避ける方法はない、ただ忍耐と雅量とで武装し、この事実と向き合い、キリストの良き兵士として苦痛を受け、(パウロが助言しているように)これを常に耐え忍ぶしか方法はないからである。しかしながら、このパウロの良き助言を胸に、これをきちんと実行するものは少なく、むしろ多くの者が野獣のごとく感情に身をまかせ、心配事と苦悩と悲惨の迷宮へと自ら身を屈して転落し、魂が打ち負かされ、本来あるべき忍耐で武装することもできないでいるものだから、しばしばこういった気分が性癖となり、「軽蔑すべき感情が(セネカが記しているように)病氣となるのである。一回の咳は、それが習慣になっていなければ、単なる咳だが、それが持続し、常習のものとなれば、肺の消耗を引き起こす」、ちょうどそのように、こういった感情が「憂鬱」の誘発につながるのである。そして人間の体内で黒胆汁が増減する場合、体温や理性的魂によってうまく抵抗できるかどうかで、この病氣の罹り方にも軽重が生じる。というのも、蚤にかまれても、ある者にとっては単なる噛み跡にすぎなくても、ある者には耐え難いほどの苦しみを生じる場合がある。またある者にとっては類稀な節度とすぐれた態度とによってうまく克服できることを、まったく忍ぶことができない者もいて、そういった人は、不当な扱いを受けていると勘違いしたり、傷ついたり、悲しみにくれたり、名誉を傷つけられたり、茫然自失となったり、試練にあつたり、噂されたりすると、ほんの些細なことでも毎回、(一人きりであるか、無為でいると)感情に身をまかせすぎてしまい、表情が変わり、食欲が減退し、眠れなくなり、精氣の流れが阻害され、心臓が重くなり、下肋骨部に悪影響を被る。そして突然、鼓腸と消化不良に襲われ、彼自身「憂鬱」に征服されてしまう。そして借金のある者が一旦投獄されるや、どの債務者も行動を起こして、そこで彼の首根っこを取り押さえるように、患者がある種の不快に襲われると、その瞬間、その他のあらゆる動揺が彼に見舞うことになる(なんとなれば——扉あるところに彼らは駆けよせる)。すると、まるで足の萎えた犬が翼のおれた鶯鳥のように、彼は項垂れ、やせ衰え、ついには「憂鬱」というあの悪癖、悪病状態に陥ってしまう。自然哲学者たちが熱氣と冷気を八段階に分けたように、我々は「憂鬱」を八十八種類に分類することができるかもしれない。というのも憂鬱に見舞われる者たちは、さまざまな形でこの病氣に襲われるのであり、地獄の淵への陥り方、そのはまり方の度合いにも大小あるからである。「憂鬱」の発作には、最初のうちは心地よいものと不快なものとのがあるが、しばらくす

ると取り憑かれた者に対し暴力的で猛威を振るうようになるものだが、これらの発作やそれに侵された人達は、間違って憂鬱と呼ばれているにすぎない。というのも、こういった発作は持続せず、患者が不満の対象に翻弄されるにつれ、現われたり、消えたりするからである。我々がここで扱う「憂鬱症」は、習慣、持続性、慢性の病気であり、アウレリアヌス達が言うように、定着した気質であり、体液は流動的でなく固着化している。そして長い間かけて進行してきたので（それが心地よいものであれ、苦痛なものであれ）常習になってしまい、もはや取り除くことができなくなっている、そんな類の憂鬱である。

*太字表記は原文がラテン語もしくはギリシア語であることを示す。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, New York: Da Capo Press, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by P. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

[解説]

ロバート・バートン (Robert Burton, 1577-1640) の『憂鬱の解剖』 (*The Anatomy of Melancholy*, 初版1621) は、きわめて特異な作品である。「メランコリー」の「解剖」というその標題からは、この書が「メランコリー」というものについて細部まで分析し網羅的に叙述したものであることが分かるが、その「メランコリー」の意味が、そう単純ではない。それは物質名としては、古代からルネサンスに至るまで伝統的な生理学を支配した四体液説における「黒胆汁」であるが、同時にこの冷たく乾いた黒胆汁が体内で優勢になることによって生じる気分、気質や性格、精神的疾患をも意味する。また、この気分・気質・疾患としてのメランコリーは、伝統的には鈍重さ、非生産性といった否定的なニュアンスを帯びていたのだが、ルネサンスの新プラトン主義の復興以来、逆に詩的狂気や思慮深さと結びつき、創造的、哲学的な営みを連想させるようになった。さらには、ペトルルカ風の恋愛詩に登場する悩める恋人のイメージも、この「メランコリー」に結びつくようになり、これは宮廷人士の振る舞いの流行ともなったのである。

こうした多用な意味の中から、バートンは自らの対象を疾患としてのメランコリーに限定し、人類を悩ますこの病の原因、症状、予防法などを詳述していく。この点では、『憂鬱の解剖』は、医科学的かつ啓蒙的な論考であり、またバートン自らが述べるように、「憂鬱症」に苦しむ患者

の益を図るというマニュアル的要素も備えた作品でもあると言えるだろう。

しかし、『解剖』の扱う範囲は純粹に医学的なものに限られているわけではない。病という人類の災厄、特に精神に関わる病を十全に描き出すにはおよそ人間に関わるあらゆるテーマを網羅する必要があると言わんばかりに、バートンは随所で脱線 (digression) する。その内容は、人体の構造や魂の機能といった、「憂鬱症」という主題とある程度関連のあるものから、デモノロジー、世界地誌、宇宙論にまで至る。また、古代・中世の文献を参照するだけでなく、当時の最新の知見を盛り込むために、初版以来、1624、28、32、38年と、増補・改訂も繰り返している。こうして『解剖』は、単なる医学論考ではなく、古代から十七世紀にいたる学知の巨大な集積、今では失われてしまった知識の宝庫となり、ルネサンスの世界像を理解する上での貴重な資料となっているのである。

さらに『解剖』は、知識の集成にとどまらず、倫理的随想としての性格も併せ持っている。自ら「メランコリー」の意味を疾患に限定したバートンだが、時にはそれを狂気一般、さらには人類の在り様そのものを含むところまで拡大する。人は多かれ少なかれ、正気を失ったメランコリー患者であり、世界は狂った患者で満ち溢れている。「笑う哲学者」デモクリトスに倣って「小デモクリトス (Democritus Junior)」を筆名としたバートンは、籬の外れた世界の悲惨を、一步離れた場所からペシミスティックな笑みを浮かべて詳述する、皮肉なモラリストの姿を見せるのである。

このように、医学書でもあり、ある種の百科全書でもあり、警世の書でもあるという『憂鬱の解剖』は、その多面的な魅力でジョンソン博士やチャールズ・ラムといった愛読者を得てきただけでなく、現代の英文学研究者の関心をも引きつけている。例えばルネサンスにおけるパラドクスの包括的な研究書である『パラドクシア・エピデミカ』を著したロザリー・コリーは、その一章をバートンに充てているのである。

とはいえ、「無人島に一冊持って行くとしたら理想的な書」とも評されるこの作品が、英語圏で一般に広く読まれているとは言い難く、日本では尚更であろう。当翻訳は、このバートンの大作の全容を日本語で紹介しようという初めての試みのささやかな最初の一步なのである。百頁を越える長い序文等、憂鬱症の原因、症状などを扱った第一部、その治療法を扱った第二部、愛に関する憂鬱症と宗教的憂鬱症を扱った第三部と、おおまかに四つの部分からなる『憂鬱の解剖』の中で、今回の翻訳は、第一部の冒頭部分、病に関する一般論と精神疾患の分類等を扱った部分のものであり、定本としたテキストで優に千頁を越える『解剖』の、ほんの一部にすぎないが、バートンの博引傍証ぶり、ラテン語引用の偏愛、そして医学的な主題を扱いながらも人類の悲惨な境遇へと叙述が横滑りしてゆく点など、作品全体の特徴を垣間見ることのできる興味深い部分でもある。

(2007年10月1日受理)

(おかむらまきこ 文学部教授)

(おかだのりゆき 神戸大学非常勤講師)

(かわしまのぶひろ 大阪学院大学准教授)